



講演 『人工知能(AI)研究の

現状とこれから』

虎長 39 卒

「人工知能によって何が実現できるかだけでなく、どのように実現されるのかも知る必要がある。」との杉山先生のご指摘は優れて示唆的である。「AIの未来に、理系学生が目を輝かせ、文系の学生が恐れを抱いた」とのことだが、どちらが良い・正しい、という話ではないと。ここでシンギュラリティ、研究開発、教育の3点について思うことを述べたい。

シンギュラリティ仮説への3つの態度

「シンギュラリティは来ないと証明できないから断言もできない」とは先生の言である。同様に「起(こ)る」とも証明できていないから、これは「仮説」といえる。「起(こ)らない」との楽観論、「起(こ)る」との悲観論、

それに中立論の3つがある。第3の立場では、何だか分からないが、経済効果があり、マスクミ受けして予算がとれるので、騒いでおこうというのが特に日本に多い、という西垣通先生の見方もある。シンギュラリティ仮説を支持する大手IT企業も、実は第3の態度に近いように僕には感じられる。大手IT企業は更に 開発結果への責任を回避するのに、この仮説を利用して「これは Jean-Gabriel Ganascia (Le mythe de la Singularité シンギュラリティ神話)の見方だ。シンギュラリティ仮説を否定・肯定にはつきり分けたがるのは、欧米的(ユダヤ・キリスト教的)一神教思想から来ているとの説もあり、知的議論としては面白いが、今やいろいろな立場の 中立」論があるように見える。AI開発には、中国人・インド人も多数関わっているのだし。

教育

AI研究ほど学際的なものはないだろう。「理系 文系」概念は、僕は昔から嫌いであり、杉山先生も、「これは日本独特のもの」と指摘されている。先生は 政治・経済・

ビジネス系にはAI利用のための最低限の技術リテラシーを」と訴えておられるが、同感である。真理を探るといふ、よい意味での 中立的立場を持たせ、AIを悪いことに利用させないためである。また「情報系にはプログラミングだけでなく数学を、医学系・その他理科系には、データ解析に對する素養を」と先生は薦められている。僕は、更に「哲学・倫理を」と付け加えたい。確かに、文系」が後年に数学を学ぶのは困難でも、理系」が後年、政治・経済を学ぶのはより易しく、特に強調すべきことではなからう。しかし、AIを制御できなくなる(と(out of loop)や、悪いことに利用されないための目を養う必要がある。内閣府 Society 5.0のようにバラ色の未来を謳うことを強調すると、「不都合な真実」から目をそらした幸福感追及に結びつくおそれがあるのではなからうか。AIの国際会議への日本人参加者が少ないことに関連して、日本の大学生の留学希望者が中国人・韓国人より格段に少ないことが、杉山先生との雑談時に話題になった。「帰国後の就職に不利になるから」とのことだ。「最近の若者は内向き

で根性がない」と非難する訳にはいかない。企業・官庁を含めた日本の社会風土をまず変えるべきだ。「国際会議・議長の抱える難題は、インド人を黙らせて、日本人に喋らすこと」というジョークが通用しなくなることを期待したい。

OECD 加盟国中、国の教育支出が最低で、教育費が家計を圧迫している問題も論じたいが、ここでは紙面の都合で控える。ただ、それが少子化の一大原因であるという持論は披瀝しておく。

研究開発

「兵器企業との共同開発を発表した韓国の科学技術の大学 KAIST」が、世の非難を浴びて撤回した」ことを先生は茶話会で指摘された。また

「悪用をとめるような監視と、善い面を伸ばすこと」も唱えられた。

大賛成である。日本では KAIST のような例はないが、防衛省の研究開発公募には、いくつかの大学が応募している。研究テーマが、それだけでは軍事利用と限られないものは、防衛省から開発費をもらいたいからだろう。大学の予算が小泉内閣以来毎年カツ

トされてきている問題点については、杉山先生のみならず、これまで新三木会講師をお願いした国立大学の先生方が異口同音に嘆いておられる。なぜ、改善されないのだろう。理研のAIP計画は「10年間の基礎研究」が保証されているとのこと。国の政策を批判ばかりしている僕も、これには感心した。大学への競争的研究開発資金」は増えているが、これを早く使い切ることが優先されてしまう、というお話も茶話会で伺った。もったいない話である。大学の基礎研究費が足りないことはノーベル賞受賞者の大隅先生、本庶先生も指摘されている。自然科学分野での日本人のノーベル賞受賞者は多いが、数十年前の成果の例が多く、近年の研究開発費の低下が危惧される。本庶先生は、また「日本の大学の研究成果が米国の企業に採用されている。日本の企業は日本の大学の良いシーズを育てず、外国の研究所にお金を沢山出してやる」(日経2018年10月23日)と述べられている。「企業から大学への開発費は少なく企業むけが圧倒的」との指摘が、文部省科学技術・学術政策研究所の「科学技術指標2018」

でなされている。文科省の批判ばかりしている僕だが、この「指標」は日本の問題点を統計的に正直に分析している点の評価したい。インターネットで公開されているので、その中の、少なくとも「概要」を一読することをお薦めする。以上

AI 進歩の蔭で

大橋延夫

(元川崎製鉄(株)技術研究所長)

貴重な内容のお話で大変参考になりましたが、多くの方が心配されているようにAIの進歩で社会や生活の仕組みが大きく変わる(便利になる?)のは結構なことではありますが、人間自身の能力はどんどん退化して行くのではないかと案じられます。

現在でも漢字やまともな手紙も書けないとか、私大の理工分野の入試に物理を選ばなくてもよいところがあるなど、その兆候はすでに始まっているように思います。人間の本質であるべき知的能力とその自己練磨の能力は恐らく低下の一途を辿るのではないかと案じられます。

新しいルネッサンスの到来に備えて教育や社会の仕組みをどのように対応させて行くべきかを今から真剣に考えてゆく必要があると思われれます。

以上



書架



將軍の世紀」(山内昌之著、2018年1~11月、月刊「文藝春秋」にて連載中)

慈海 39 卒

本書は11月の講師・山内昌之氏が「有識者会議」のメンバーとして取組んだ最新のテーマの所産である。平成天皇の生前退位意向が出され、有識者会議で退位の是非、摂政の有無、制度の在り方等を論議、来年4月30日退位、5月1日皇太子の即位で決着。この間、政権と天皇の意向の違いがまま表面化した。家康時代同様の政府と天皇の緊迫した関係があつたとも推測される。山内氏は、江戸時代の後陽成天皇や後水尾天皇の譲位や宮中の統制を巡り交わされた朝廷と幕府の緊迫した関係、家康らが直面したことの性格を検討すべく、本書を執筆した由。

まずは、天皇の意向を平然と無視

する家康の強固な意志・態度には驚かされる。家康と後陽成天皇の譲位と後継者指名を巡り展開される暗闘に、家康は「言うことを聞かなければ、以後、音信せず」と脅迫、力で押さえつける。また、山内氏の歴史に取り組み考え方、40年の問題意識の集大成、トルコ革命とロシアの新国家形成を描く『甲東国際関係史研究』に見られる人間関係や現実政治との関係、理想とリアリズムを交錯させながら事実を追及、叙述を重視するスタイルがここでも発揮されている、と感じた。

將軍の世紀：江戸幕府が支配した17世紀から19世紀に至る270年の歴史は三つの世紀が一つの東になった世紀」と考えられ、簡潔に定義すれば、この表現が一番適切であろうと。その特徴は、近世以前に繰り広げられてきた天皇・公家・寺社・武士など政治権力を狙う多様な勢力が將軍を中心に国家の規模で再編成された点にあると指摘。

1603年正月、後陽成天皇は、伏見城に勅使を使わし 内府將軍に御な

り候」と内勅を伝え家康は拝受する旨答える。家康は二条城で使者を迎え、大名や公家に儀式を見せつけ、新たな武家権力の成立を可視化した。事実上の武家筆頭の地位は將軍宣下により法的に認知され、名実ともに豊臣から独立した徳川政権が成立した。家康は「朝廷の外部」に政権を作ることにこだわった。

家康は後陽成天皇をないがしろにした訳ではない。むしろ儀式では天皇をできるだけ尊崇し、日常に障りがないよう、禁裏御料や金銀を進献。年頭の御礼、官位昇進の御礼など加味すると、総実収は、総実収は、40、50万石と見られた。後陽成天皇は、周囲に譲位の意思を伝え、1598年10月18日、正式に体調を理由に隠居(退任)申し出。將軍でもない家康が11月18日、その儀に及ばずと。

家康は退位の中止を申し入れ。反對理由は、院政を敷き秀吉死後と家康台頭の情勢に対処しようと、皇位を同母弟の八条宮智仁親王に譲ろうとしたから。家康は大臣たちの心が動いていると第三皇子、後の後水尾天皇を皇太子に推す。折から、朝廷内で公家と官女による乱倫が発覚、

天皇は激怒、全員を斬罪と。しかし、家康が事件を奇貨として宮中の事件の検断権を取り上げる。

1610年2月、漸く駿府から譲位と三宮の元服を涼とする飛脚。続いて、譲位の儀を伸ばすと伝えてくる。同4月、家康は御讓位次第「七つの条々」を示す。後陽成天皇に知らされ、天皇は朝から酒。七か条は、三宮への譲位を巡る天皇と家康の暗闘を今に伝える。特に、官女密通の件で武家の棟梁・家康が天皇の意思を無視、流罪の咎人の兄弟を差し出せと指示。

○五：七か条：①徳川父子の一人が上洛して譲位の世話をするが、やりたいたら進めればよい。必要な手続きを命じる。②三宮の年内元服を認める。③天皇実母を天皇近くに住むよう進言(家康とのつなぎ役を期待)。④徳川父子上洛前は実母に囚り天皇に伝えてもらうのが望ましい。⑤実学をきちんと修め行儀や定めを正しく守る。⑥官位は家格に応じて与えられ、奉公に励むべき。⑦官女密通一件の公家の兄弟たち兩人を召し出して奉公

させよ。

天皇は「越軌」として反応を示さず。家康が譲位を妨げたのは、退位問題と武家権力との独特な緊張関係、および、秀頼との二重権力の問題未解決と判断したからか。七か条を公にしないのは天皇の真意を院政への執念にあると見た。天皇は自分の意見がこうも通らぬほど、皇位は軽いか。武家の意思が禁裏を超越するのとかと切齒扼腕、ただ泣きに泣くのみで時間が空転。

やむなく、摂家衆が天皇に奉聞すると「各点」と。

各自存念があれば意見せよ、天皇に上申しなければ、以降は、普信を交わさない

と脅迫。1610年12月23日元服。翌年3月27日、天皇譲位、上皇成り。4月12日、後水尾天皇即位。家康は後に孫娘の和子を后にする。尚、後陽成天皇は、歌論を講じ、能書家で絵も巧み、漢詩、儒学にも造詣が深く博識だった。

以上